
写輪眼を持って伝勇伝へ

シンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

写輪眼を持つて伝勇伝へ

【Nコード】

N5819Q

【作者名】

シンス

【あらすじ】

神様の手違いで殺されてしまった少年は、写輪眼を持つて伝勇伝の世界へ行くというお話（作者に文章力はありません．．というより文章力皆無です）

1話

1話

目が覚めると宇宙にいた

は?????????????????????
?????????

俺は昨日きちんとお布団被って寝たはずだ
では、ここは?

言っまでも無く宇宙だ
なぜ?

そうこう考えているうちに、俺は気付いた

息ができているということに

宇宙で息など出来るわけが無い

まあ、行ったことは無いので本当にそうかは知らないが・・・
今度、理科の先生に聞いてみよう

俺は、宇宙？を散歩することにした

・・・だって、息ができるんだし

この先、写真や映像以外で宇宙を見ることなんて無いだろうし・・・

にしても、地球はでっかいねえ！

俺は今、ひまわりの上に座っている

えっ、宇宙にひまわりがあるのか？

・・・甘いな

俺が座っているのは人工衛星のひまわりだよ

意味が解るか？

まあ簡単に言うといまわりという人工衛星があつて、そこに俺が
座っているわけだ

ついでに俺は昨日たまたま寝る前に、宇宙の本を見たからひまわ
りのことを知っているんだが・・・

昨日たまたま寝る前に見た？

わかってしまった

そう！これは多分夢だ！

寝る前に日頃、見もしないのに宇宙の本を見たからこのような夢

を見ているのだ

「夢では無いぞ」

「！」

振り向くとそこには、車椅子に乗っている白い服を着ている白髪のおじいさんがいた

「誰？」

「神」

即答された

この状況が理解できる人は少ないであろう

だがな、俺はできるのだよ

Arcadiaやにじファンというサイトであらゆる小説を見てきた俺にはな！

俺はそのおじいさんに聞いてみた

「神の世界じゃ」

どうやら宇宙？の名前は神の世界というものらしい

なんでも神様曰く、宇宙は神様の世界をコピーして何も無かった場所に貼り付けたりらしい

さっぱり解らん

だが、今そんなことはどうでもいいのだ

問題は、なぜ俺がそんなところにいるのか？・ということだ
まさか俺が人間から神に昇進・・・なわけないか

「で、なんでそんなところに俺がいるんだ？」

「お主は、わしの手違いで死んだ」

願わくば神に昇進などと考えていたのだが現実はそう甘くはない
ようだ

にしても・・・死んだとはね

正直結構つらい

「そうか、死んだのか」

結局言葉が見つからなくてそれだけ呟いた

「・・・そこでじゃが、・・・お主には転生してもらおう」

よくあるssの転生ネタだな

となると、大体はチート能力がつけられるはずだ

「しかし、わしの手違いで死なせてしまったんじゃから、特別に写輪眼を付けてやろう」

ほら来た

しかし、写輪眼とはね

説明しよう

写輪眼とは「NARUTO」という漫画の中に出てくる眼であり、その眼は、忍術・幻術・体術の技を全て見極めコピーしてしまうことができるというチートな眼である。さらに、この写輪眼にはもう一つ上の万華鏡写輪眼と呼ばれるものがある。しかし、一度開眼するとその能力を使えば使うほど失明へと向かっていくリスクを伴う。

「できるだけ失明はしたくないんだが」

「安心せい、視力の落ちぬ写輪眼じゃ。それに万華鏡写輪眼初同時に、片目に二つずつの能力でどうじゃ？」

そいつはありがたい

「どんな能力だ？」

「万華鏡写輪眼を開眼すればわかる」

なるほど、確かにその通りだ

「まあ、精々頑張って開眼させることじゃな」

どうやら生まれた時から万華鏡写輪眼というわけではないらしい
・ 確か写輪眼から万華鏡写輪眼になるのには謎が多いんですけどね

「写輪眼は生まれた時から開眼できるようにしておいてやる」

しかし、写輪眼は生まれたときから開眼できるらしい

「他には、チャクラが無限とかできないのか？」

「無理じゃ」

どうやら神様にはこれが限界のようだ

「せめて、あともう一つだけでも・・・」

俺は何とか能力をあと一つだけでもつけてくれるように頼んだ

「無理じゃ」

二度も言われてしまった

「では、転生をするぞ」

俺は転生した

1 話（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました

2話

2話

俺は6歳くらいの姿となって転生した。
だが、転生したはいいが、いきなり牢屋に入れられた。
一体、俺が何をしたっていうんだよ
まあ、十中八九写輪眼関係だろう

ここで問題になるのが、どこの里に転生したかだ
下手に音隠れの里などだったらとんでもない
大蛇丸の餌食になってしまう

「おっちゃん、ここどこだ？」

俺は見張りのおっちゃんにここがどこか聞いてみた

「？」

聞こえなかった様なので、もう一度聞いた

「おっちゃん、ここどこだ？」

「s f h g j g d v u d r s k j y h f y j n m h？」

「は？」

「a y j h f t g t e w n k l / . j k h f g f b j k g n f g
h f？」

泣いてもいいだろうか？

・ ・ どうやら、言葉が通じないらしい

はあ・・冗談はやめてほしいね

俺は神様を恨んだよ

だつてさ、だつてさ、神様のミスで殺されるし、転生したらいきなり牢屋に入れられるし、拳句の果てに言葉が通じない

冗談じゃ無いぞ

俺は大きな声で思いつきり叫んだ

「神様の大馬鹿野郎……………」

4話

4話

目が覚めると宇宙にいた

「久しぶりですね、神様」

そう、今俺の目の前にいるおじいさんは神様である
つまり、俺はまた死んだということなのだろうか？

「まだ、お主は一度しか死んでおらぬぞ」

どうやら、違うようだ

俺は、まだ生きているらしい

当然だ！

これで、また死んだなんて聞かされた日には、俺は神様を殺してやるぜ

えっ、殺せるのかって？

さあな、だが神様は車椅子に座ってるくらいだから、なんとかならんじゃね？

「実は今日はお主に用事があったな・・・」

「何用ですか？」

「お主に記憶をくれてやる」

記憶？

俺の転生する前の6歳までの記憶か？

まあ、無いより有った方が良いのだが・・・

それより、転生する前に言語の能力くれやがれ！

「お主の前世の記憶じゃ」

いやいや、神様・・・まだまだ前世の事を忘れてねーぞ！
マジで殺していいだろうか？

「前世の記憶と言っても、お主が前世で一瞬でも見たものは即座に思い出せるという記憶じゃ」

「よく解らん」

「いずれ解る・・・」

そう言い残して神は消えた

4 話（後書き）

あゝ・・やだなあ、学年末考査

読者の方にもし、試験間近の人がいたら、ぜひ頑張ってください

5話

5話

今、俺は螺旋丸の練習中だ

どうやら、この世界でもチャクラは使えるらしい

って、もし、チャクラが使えなくて、さらに、写輪眼で魔法をコピーすることができなかつたら最悪の状況に陥るわけなのだが・・・

「おらよ、ゴムボール、買ってきたぞ」

「おう、サンキュー・・・悪いね、おっちゃん」

にしても、このおっちゃんはかなり親切だ
水風船も十個ほどすでもらっている

「おっちゃん、お金大丈夫なのか？」

「あんまり大丈夫とは言えないけどね・・・まあ良いつてことよ」

そうだ！良いことを思いついた

「おっちゃん、紙と筆を持って来てくれ」

「ああ、別にいいが・・・いきなりどうしたんだ？」

どうしたって？

今、思いついたんだが前世で流行った本をここで売ったらかなり

売れるはずだ

そして、売った金で修行用具などを買い、残った金を見張りのおっちゃんにあげようという計画だ

「まあまあ、いいから取ってきてよ」

「しょうがねえなあ」

そう言っておっちゃんは紙と筆を取りに行ってくれた

数分後

「おらよ、取ってきたぞ」

おっちゃんが帰ってきた

「ありがとう」

俺は早速、作業にとりかかった

書いた作品は「フランダースの犬」と「南総里見八犬伝」だ
少し設定や名前を変えてはいるが・・・
かなり売れた

それから、修行や執筆活動に勤しんで三年の月日が過ぎた

神様が言っていた前世の記憶だが・・・すごく便利だ

一瞬でも見たものは、すべて完璧に思い出せるのだ
これのおかげで俺は、忍術を使えるようになった
ただし、記憶の中の映像は写輪眼でコピーできないようだ
ついでに、俺は火と水の性質変化を持っている
さらに、前世で読んだ本も完璧に記憶されているので小説も書ける

最高の記憶だった

それから、修行や執筆活動に勤しんで三年の月日が過ぎた

修行の成果として「螺旋丸」、「掌仙術」など、印を使わな
いで済む忍術はあらかた覚えた

さらに火遁と水遁の術はBランクの忍術くらいなら使えるよ
うになった（牢を壊さないように威力は抑えているが・・・

また、執筆活動の方は、「三国志」、「水滸伝」、「アルプ
スの少女ハイジ」を執筆、かなり売れたらしい

そのおかげで飯がうまくなり、高級羽根布団も買ってもらった

また、執筆活動の方は、「三国志」、「水滸伝」、「アルプ
スの少女ハイジ」を執筆、かなり売れたらしい

そのおかげで飯がうまくなり、高級羽根布団も買ってもらった

そんな日の事である

「おう、今日は新入りを連れて来たぞ」

新入り？

ライナか？

「ライナ・リユートだ。よろしく」

ビンゴ！

やっと来ましたか、ライナ君

さて、俺も自己紹介を……って、俺の名前ってなんだっけ？

前世の名前を使うわけにもいかないし……

「よろしく！」

とりあえず、そう言った

「ああ、ところでお前、名前は？」

やっぱり聞かれた

……どうすつかね

「おっちゃん」

「ん、どうした？」

「俺って、名前なんだっけ？」

おっちゃんに聞いてみた

「そついえば、そつだな」

「えつ、お前、名前無いのか？」

「ああ、まあな」

というより、ここまで名前が無いのに会話を続けていた俺とおつち
ゃんは凄いよ

にしても、名前が無いというのは……
どうしたもんかね

「急に思いついたんだが……スカイ・セイシエルってのはどう
だい？」

「おつ、なんか格好いいな……どつたのおつちゃん？今日は冴
えてるじゃん」

「なに言つてんだ、俺はいつも冴えてらい！」

というわけで、俺の名前はスカイ・セイシエルになった

「つてわけで、俺の名前はスカイ・セイシエル！よろしくな」

「ああ、よろしく……だが、スカイ・セイシエルっていうと
有名な作家でいたような気がするんだが」

「おつちゃん、まさか……」

「三年前に本を出すときに悩んで付けたのさ」

その時に俺の名前に気付かなかったのであろっか？
まあ、それは置いておくことにしよう

「急に思いついたんじゃないのかよ？」

「固い事言っなよ」

かくして俺は、スカイ・セイシエルになった

6話

6話

「にしても・・お前、そんな年でいつたい何したんだ？」

ライナが話しかけてきた
ちなみに俺とライナは同じ牢に入れられている

「別に何もしてないんだがな・・」

「嘘つけ、じゃあなんで、こんなところにいるんだよ？」

いやいや・・本当に何もやってないんですよ・・ライナ君
いきなり殺され、勝手に転生させられ、牢屋に入れられているだ
けだ

だが、こんなことが言えるわけがない

「この眼が問題らしい」

俺はそう言つと「写輪眼」を発動させた

「なっ！！複写眼！！！」

正確に言つと写輪眼なんだがな
どうやらライナは、魔眼のことをあまり知らないらしい

「で、お前は何をしたんだ？」

今度は俺が聞き返した

まあ・・・理由は知っているんだが・・・

「俺もお前と一緒に理由さ」

そう言ってライナは「複写眼」を発動させた

「なるほどな・・・・・・ところでお前、魔法使えるか？」

もつとも、使えないわけが無いのだが・・・

「使えるが・・・一体どうしたんだ？」

「撃つてみてくれ」

俺はライナに魔法を撃ってもらいコピーすることにした
コピーできるかどうかは、わからないのだが・・・

「何言ってるんだ？・・・お前」

「俺さ、魔法を知らないからコピーしたいんだよね」

「それで、魔法を教わって壁を壊して逃げようってか？」

やれやれ、俺がそんな野蛮に見えるのかねえ？

「んなわけねーだろ・・・そんな事したら看守のおっちゃんの
責任になっちまう」

「ほー・・・優しいんだな」

「随分と世話になっているからな」

いくら仕事とは言え本当に世話になっているのだ
俺もライナも

このあいだ俺は体術を練習するために、たくさんのお金を買っ
てもらったんだが、持ってくるのにかなり苦労していた

「そんなことより、お前は外に出たいとか思わないのか？」

「ああ、・・・こうやって昼寝している方が楽しいな」

なるほど、ライナらしい考え方だ

「そうだ！魔法を教えてやるから一つだけ俺の頼みを聞いてく
ない？」

頼みねえ・・・なんだろう？

「どんな頼みだ」

「文章の書き方」

「なんだ？お前も本でも書くつもりか？」

「いいや、興味があるだけだ」

どうやらライナ・レポートの参考にでもするんだろう

「ああ、わかった」

俺は前世の記憶の国語の教科書を参考に承諾することにした

こうして俺は魔法を教えてもらった

それから数日後

俺は真夜中に人の気配を感じて起きた

「誰だ？」

「あ、すいません、起こしてしまいましたか」

どうやら、シオン・アスタールようだ

「名乗る程の者ではありませんよ・・・あなたは？」

人の名前を聞くときは自分から・・・という言葉を知らないのだろうか？

まあ、敢えてそこはスルーすることにする

「スカイ・セイシエルだ」

「スカイ・セイシエルというと・・・あの小説家の？」

どうやら、俺の作品を知っているらしい

「ああ、そっだ」

「まさか、牢の中の人だったとは」

嫌味か？この野郎！

こちらら・・・いや、もういいや

「一体何をしたんですか？」

「これさ」

俺はそう言つと「写輪眼」を発動させた

「！・・・なるほど、・・・・・・では私はこれで・・・また会いましょう」

シオン・アスタールはそう言い残して去って行つた
それにしても、また会いましょうか・・・

もしかすると、ライナが牢を出る際に俺も出してもらえるかもな
あ・・・

などと考えつつ、俺は再び眠りの世界へと旅立つた

7話

7話

それから長い年月が過ぎて行つた

その間に看守のおっちゃんに自分の嫁さんや娘さんを紹介されたりして、それなりに満足した日々を送っていた

「おお、待つてたぜ・・・おっちゃん・・・今日の飯は・・・ん？」

「どつたの、おっちゃん？元氣ないねえ」

「心配するなよスカイ。・・・どうせまた夫婦喧嘩でもしたか、あるいは娘に彼氏でも紹介されたんだろーよ」

「ば、馬鹿言つな！！うちの娘はまだ三才だぞー！！！！」

うん、この会話聞いたことがある

「今どきの三才はすごいんだぞ、おっさん知らねーだろ」

「いやいや、ライナ・・・お前ももう今どきは知らないだろ」

「おっ、それもそうか」

そんなことを言っていると看守のおっちゃんが牢の鍵を開けた

「そっか、処刑が決まったか・・・できるだけスカイと一緒に死にたいんだがなあ」

死ぬなら一人で死にやがれ
こちら、一回死んでんだ

「おいおい、俺はまだ死にたくねーぜ！世捨て人のお前と一緒に
すんな！」

「っな！世捨て人はねーだろ！」

そんな会話をしているとおっちゃんが再び口を開いた

「二人とも・・・だそうだ」

あれ、・・・ということは俺も助かるってことか？

まあ、ここまできて

俺のライナとこれまでもずっと一緒にいたんだ、充分だろう・・・
なんてシオンが言うはずは無いだろう・・・多分

それから、看守のおっちゃん一家と別れを済ませた後、フェリスと
会った

「なあ、美人さん」

ライナがフェリスに話しかけた

「なんだ、色情狂」

「っな・・・なんで俺が色情狂か教えてもらいたいんだけど」

「顔だな」

うわゝ、ひつでえ・・・ライナは結構格好良く見えるんだがな
あ、ちなみに俺は神様に結構格好良くしてもらっている

「はあ！？・・・まあ良いや・・・悪いけど俺このまま死ぬわけにはいかないんでね」

「つて、ライナ！さっきは思いっきり死ぬ気満々だったじゃん！」

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

俺、なんか盛大に無視された

ライナの放った魔方陣から雷が放たれた
それを、フェリスが剣で受けそのままはね返した

「おいおい、マジかよ」

「どうする、ライナ？手伝おうか？」

「手伝ったところで無意味だよ」

「「「！」「」」」

そこにはルシル・エリスがいた

「君達の相手くらい僕一人で充分だよ」

確かに・・・そうかもしれないな

「「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」」

だが、とりあえずは戦ってみようと思う

俺はライナと共に身体能力上昇の魔法を使った
さらに、俺は自分に付けていた重りを外した

「へえ、重りを付けてたということは「なっ！！？」君の方が強いのかな？」

気付いた瞬間にはルシルが目の前にいて、鳩尾にパンチを繰り出そうとしていた

俺は、写輪眼を使い何とか回避した

「ライナ！手伝ってくれ！！」

しかし、ルシルはさらに攻撃をしてきた
写輪眼をしているにも関わらず俺は避けるので精一杯なのでライナに助けを求めた

「無理だ」

「はあ！！？」

なに言っちゃってんの！？

まずは、ライナから殺してやろうか？

って、その前に俺がルシルに殺されるのだろうか・

「いやな、俺が魔法撃つたらお前にも当たると思っぞ」

確かにそうだ

しかし、ならばどうする！？

忍術を使おうにも攻撃を避けるので精一杯

さらに、目を合わせるだけで幻術にかけれる写輪眼だが、目を閉じたまま戦っているルシルには効果が無い

と、いうよりもルシルの野郎はまったく本気を出してない

ああ・・・なんだか自分の無力さに泣けてくる

「求めるは静寂>>>・闇庭」

状況を察したライナが魔法を撃ってくれた

ついでに言うと、ライナは牢の中で幻術の練習の実験台だったりする

ライナが魔法を撃ってくれたおかげでルシルが一瞬だが目を開いたその一瞬で俺はルシルに幻術をかけた

「さあて、ライナ！逃げようや！」

「ああ」

「待て！」

目の前にはフェリスがいた

そういえば、いたね・・・忘れてた

「へえ・・・相手に幻を見せる術か・・・でも、面白いだけだ」

復活、早すぎっ！

と、思った瞬間には俺は意識を飛ばされた

7 話（後書き）

学年末考査まで、あと一週間!!

一体俺は何をやっているんだろう（笑）

.....一年生になれたらいいな

8話

8話

「おつ、起きたか？」

今、俺はライナにおんぶされている
あゝあ、フェリスの方が良かったな

「今、何か言ったかい？」

「いえいえ、何も言ってませんけど」

「そうかい、それは良かった」

危ない、危ない・・・もうちょっとで殺されるところだった
そいえば、忘れていた

たしか、こいつはシスコンだったな
だったら、ライナと協力してフェリスを人質にしていれば逃げ
てたのかもしれないな

「何か言ったかい？」

「ですから、なんにも言ってませんって」

にしても、気持ちの悪い笑みだ
こいつは年から年中笑っているのかねえ・・・
実写版を作るなら「堺雅人」さんに決定だな

「どうでも良いけどさっさと降りろ」

そういえば、俺は今、俺はライナにおんぶされているんだっ

「悪い悪い」

「さて、着いたよ」

「ようこそ、ライナ、我が宮廷へ・・・よ！」

「俺、もう疲れたから今日は寝る、スカイ・・・五千年くらい経ったら起こして」

「いやいや、ライナ、五千年ってどんだけだよ・・・」

「おいおい、仮にも王の御前だぞ」

「やだ！俺は眠いんだ！」

「そういえば、スカイ君とも以前に会ったよね・・・覚えているかい？」

「ああ」

「えっ、スカイお前、こいつと会ったことあんのか？」

ライナが起きて聞いてきた

「ああ、あいつ、寝ているお前を襲おうとしていたんだ」

「何！？王も、もうすでに色情狂の配下にあるということか！」

フェリスが話題に乗ってきた

「ああ、残念ながら」

「ちよつと待て！今の話と色情狂がどこにどう関係している！」

「おいおい、そもそも俺は襲おうとなんてしていないぞ」

「いや、お前の事だからわからない！・・仕事のしすぎで頭がおかしくなったのかもしれん」

「いやいやライナ、仕事のしすぎで男を襲う奴はいないと思うぞ」

「いい加減にしろよ、ライナ・キファの事、教えてやらないぞ」

シオンがキファの事を言い始めた

「別に良いよ「彼女は死んだよ」えっ！！？」

「嘘だよ」

シオン、酷い

これは普通に酷い

ライナがかわいそうだ

「キファはな、お前のことを俺に頼んで国から出た。この世界をもつと見て回りたいんだとさ。・・けど、お前に来てもらったのはそんなことを教えるためじゃない」

そう言つとシオンは、紙を手を持った

「あつ！俺のレポート！」

「昼寝王国を作るためには・ふざけたタイトルだけど、中身はなかなか面白い。伝説の勇者の遺物・その桁外れの威力を抑止力として使う事で世界中の戦争を無くす。・すごい、よくこんな思いついたなあ」

「人のレポート勝手に読むなよ」

「俺はこのレポートが気に入った。というわけでライナ、お前はこれから世界各地をめぐり、その勇者の遺物とやらを掻き集めてきてほしい」

「はー！！なんで俺が！！！！？」

もともと、この部屋は音が響く様に造られているので、うるさいこと、この上ない

「ライナ・うるさい」

「あ、悪い」

「しかし、ライナだけじゃ怠けそうで心配だ。フェリスとスカイにはライナの補佐役として付いて行ってもらいたい。世界の平和のために、一つ頼むよ」

どうやら、俺も一緒に旅に出ることになるようだ

「誰が、俺は暇つぶしにそのレポートを書いていただけで「俺の命令を聞かなきゃあ・・・死刑だ」なっ！どこが平和だよ!？」

「貴様、何を考えている？私は兄様に命じられてお前を手伝っているだけで、お前の部下になっっているわけじゃない」

「ルシルには承諾を貰っておいたよ。彼いわく、フェリスが言う事を聞かなければ即座にウィニット団子店はとりつぶし、になるそう
だ」

「おい！シオンー!!」

いきなりクラウ・クロムが入ってきた

「どうした、クラウ？」

「反乱が起きた!・・・いや、反乱というよりは交渉に近いんだが」

「詳しく聞かせてくれ」

「わかった」

ほう、この時期に反乱とは・・・
おかしい

原作では、こんな事なかったはずだ

「ライナ！スカイ！いきなりだが反乱を鎮めてきてほしい」

「「はあ!!?」」

この時期に反乱

さらに、それを鎮圧しろとは・・・
これから一体どうなるのかねえ？

「「はあ」「

俺はライナと共に盛大な溜息を吐いた

「おいシオン、何で俺達が行かなきゃならない？それに鎮圧しに行くと言って、もし俺達が逃げたらどうする気だ？」

「そうか・・・フェリス、逃げないようにライナ達について行ってくれ」

ライナは無視された

「わかった」

「いやいや、ちょっと待ってくれよ、王様」

「どうした、スカイ？」

どうした、じゃ無えよ

それで俺達が死んでしまう可能性だってあるんだぞ

「最初のライナの質問に答えろよ。こちらら死ぬ可能性だってあるんだぜ」

「それは無いよ・・・クラウ、説明をしてくれ」

無い・・・どういう事だ？

「今回起こっているのは反乱というより抗議だ」

「抗議？」

「ああ・・・てめえらが変わった眼を持つてるっただけで、何も殺す必要は無えんじゃねえか、って言っていやがる・・・まあ確かにそんな眼を持って生まれてきたかったわけじゃあ無えんだろっから奴らの言い分も一理あるがな」

ほう、俺の記憶ではクラウドは魔眼を嫌っているはずなんだが・・・
ついでに俺の写輪眼は欲しくて貰ったものだな

「クラウド、お前以前は複写眼を嫌っていなかったか？」

ナイスだ、シオン！

シオンが俺の訊きたいことを訊いてくれた

「・・・自分の好きな本を読んで、書いた奴が変な眼を持っているって言われてもな・・・」

俺からしてみればクラウドは本など読みそうな気はしないのだが・・・

「へー・・・クラウド、お前も本を読むのか？」

「！・・・おいシオン、お前俺を馬鹿にしてんのか？」

「別にそんなことは無いよ」

「本当に有名なんだな・・・よかったなあ、スカイ」

ライナ、お前に悪気はないんだろうが、そう言われても全然嬉しくないぞ！

「特に南総里見八犬伝が俺は好きだな」

さいですか・・・クラウ君

よかったなあ、馬琴さん！

あんた、褒められてるぜ・・・

「それはそうと・・・ライナ、スカイ、フェリス、お前達には民衆を説得した後、すぐに旅に立つてほしい」

「断る」

俺は旅には出ないつもりだ

旅に出るとフィオル・フォークルが死んでしまうからな

この世界に来ての俺の目標

それは本来死ぬはずの人間を助けることだ

そのためにも、せめてフィオルを助けてからでないと旅に出ることができないのだ

「どうしてだい？」

「王様よ、ライナはあんたの事を信頼しているんだろうが、俺はあんたを信用していない。あんたが勇者の遺物を悪用するとも考えられる。・・・だから、あんたの側近にしてくれ。もし、あんたが良い人だった場合は旅に出よう。しかし、あんたが悪人だった場合は・

・・・」

「俺を殺す・・・か、はっはっは、なるほど面白い！！いいだろう」

「おい、シオン！」

「いいじゃないか、クラウ・・・確かに複写眼を持っている人間は周りがうるさく言うだろうがスカイは人気がある・・・そうだろう？」

「ちっ、・・・好きにしろ」

「じゃあ命令を撤回しよう。ライナとフェリスはさっき言った通りだ。スカイは鎮圧したあとに戻ってきてくれ。・・・クラウはスカイ達について行ってくれ」

こうして俺は旅に出ずに済んだ

8話（後書き）

なんか短いような気もするけど、学年末考査が近いんで許してください

はあゝ・・・学年末考査まであと4日

なれたらいいな2年生

9話

9話

俺は今、ローランド帝国にある大きな公園に向かっている。

なぜかって？

ローランド帝国の王様から「反乱を鎮圧しろ」って命令をされたからさ！

牢屋から出てきて一日も立ってないのに酷いよね。

ああ、お日様がまぶしい。

「着いたぞ」

そうこう考えているうちに公園に着いてしまった。

なんか、凄い。

「スカイ死刑反対!」、などと書いてある看板を持っている。

「おらよ」

クラウドがスピーカーを差し出してきた。

これで喋れという事なのだろうか？

やれやれだ。

「えー、みなさん静かにして下さい」

会場が静まり返った。

視線が痛い。

「だったら、スカイを連れてこい！」

「私が、そのスカイです」

「……ここまで来てなんだが、俺がスカイだって証拠がねーよ！……！」

「どうすんだ！？」

「クラウを見ると口笛を吹いてやがらあ！」

「だったら証拠を見せやがれ！！」

「そう来ると思っただぜ！」

「証拠？」

「ねーよ！そんなもん！！」

「どーすんだ、馬鹿クラウ！！」

「なつ、馬鹿だと！……てめえ俺に喧嘩売ってんのか？」

「武力交渉ってか！」

「いいだろう！」

「やったるやないかい！」

「待て、本物だ！」

「よく知っている人間が出てきた。」

「……看守のおっちゃんだ。」

「おっちゃん、こんな所で何してんだ？」

「何って、・・・お前らを助けるために王様に抗議してんだ」

見りゃあ解るよ、そんなもん！

「ああ、てめえが首謀者か！？」

「はい」

クラウ怖いよ！

おっちゃん怖がつてるよ！！

「よく、こんな事を考えついたな」

「スカイやライナは処刑されるべきではありません」

されねーよ！

されてたまるかよ！

「安心しろ、こいつらは処刑されねーよ」

「それは本当ですか！？」

「ああ、ライナは私と共に極秘任務、スカイに至ってはシオンの側近だ」

フェリスの言った事を聞いて、おっちゃんは安心したようだ。

「にしても、どうやって、こんな人数集めたんだ？」

「お前が殺されるって町中の人に言っただけだ。・・あれだけ長い間世話していたんだ。お前やライナは俺にとって家族同然だ。・・いざとなったら、軍人も味方になってくれたし、戦争資金も沢山あったしな」

戦争起こす気だったのかよ！

だいたい戦争資金って俺が本を売って稼いだ金だろーが！！

「そうだ、お前の金はどうする？・・まだ全然使って無いぞ」

どうやら、俺の用事以外には俺の金を使ってないらしい。

ファンから届いた生鮮製品は使ったらしいが・・

人が良さすぎだよ、このおっちゃん！！

「間違った事をしてるわけじゃ無いんだ！神様だって味方してくれる筈だ！」

多分、味方しねーよ！

むしろ神様におっちゃんの爪の垢を煎じて飲ませたいよ！！

「そういえばスカイ」

ライナが話しかけてきた。

「なんだ？」

「お前住むところはどっすんだ」

そういえば、そうだなあ・・

「だったら、俺の家に来い！」

おっちゃんが話に乗ってきた。

ライナが笑っている・・

確信犯か、この野郎！

「話の途中で済まないが、・・私とライナは、もう行かせてもらう」

フェリス・・空気読めよ！

そっついのをKYっていうんだぜ！！！！

つと、これ以上言つとシスコンお兄さんが飛んでくるから止めておこう。

「そうか、お前も偶には帰ってこいよ」

「ああ、そうだ！・・おっちゃん、一つ頼みがあるんだけど・・・

」

「何だ？言ってみろ」

「俺もスカイも今度から、おっちゃんの事を親父って呼んでいいか？」

「ああ、もちろんだ！」

ライナのせいで、おっちゃんが泣きそうだよ！

つて、俺も目から水が流れてきた・・

「じゃあ、俺はもう行くよ、スカイ、おっちゃん、・・元気だな」

そう言ってライナとフェリスは旅立っていった。

「じゃあ、俺らも行くとするか、スカイ！」

「ああ、．．おっちゃん、今日の晩飯カレーがいいや」

「おうよ、かみさんに頼んでおいてやるよ」

そう言って俺とクラウドは宮廷へ向かった。

9 話（後書き）

やっべえ！

多分、欠点2個取ったと思う。

あと2個で留年だよ！！

・ ・ 勉強しよう！

10話

10話

牢屋から出てきて一日目

俺は今、書類の整理をしている。

英雄王シオン・アスタール？

笑わせんな！

どんだけ部下に働かせてるんだ！

「あ、その書類はそっちじゃなくて、よいしょと・・・こっちですよ」

あ、この人は俺の仕事の先輩、フィオル・フォークル先輩だ。

「すみません、先輩」

「ははは、先輩なんて言わないで良いですよ」

などと、言っているが仕事の手際の良さは半端じゃない！

「つと、あ、もうこんな時間か、・・・そろそろお昼ご飯に行きますけど、一緒にどうですか？」

もちろん行かせてもらいますとも！！！！

もう4時間働きっぱなしだぜ！

「行きます」

「じゃあ、一緒に行きましょう！でも、その前にアスタール陛下にもお昼ご飯を持って行かないと！」

やれやれ、先輩が働き者っていうのは困るぜ・・
全然働かないっていうのも、それはそれで困るのだが・・

「さ！行きますよ」

って、俺もかよ！

それから、調理室に出向いてシオンのご飯を貰って、今はシオンの部屋にいる。

「そうか、一緒に昼を食べに行くのか！・・だったらスカイに町を案内したらどうだ？」

「いいですね」

「おいおい、王様！仕事はいいのか？」

もつとも俺としては、さばれた方がいいのだが・・

「もちろん明日にして貰うから心配いらないよ」

だそうだ！

まあ、今日帰ってきてからしろって言われるよりは幾分マシだな。

「では、アスタール陛下、僕達はこれで」

「ああ、ありがとう、フィオル」

「ばいばい」

「ああ、またな。・・・スカイ」

俺はこの後、フィオルと飯を食って今は町中だ。

「さて、どこに行きますか？」

「そうだな、あまり服を持ってないから服屋とか武器屋なんかに行ってみたいですな」

「だったら、ここに行ってみますか」

そう言ってフィオルは一枚の紙を差し出した。

「なんすか、その紙？」

「さっき、うどん屋で貰ったんですよ。開店したばかりらしいですよ」

じゃあ、行ってみるか。

「いらっしやいませ」

「珍しいものが沢山ありますね、・・・あれなんて刀に見えないですよ」

俺はそこにある一つの武器を見て焦った。

「贗殿遮那」・・・頑丈な剣です

などと書かれているのだ。

「すいません、店長いらっしゃいますか？」

「少々お待ちください」

そう言うと店員はどこかに奥へと入っていった。

「どうかしたんですか？」

フィオルが聞いてくる。

「いえ、ちょっと気になる事があって・・・」

「お待たせ致した。わしが店長の神じゃ」

神様だ・・・

予想はしてたんだけどね。

「へー、神って言うんですか」

「いかにも」

「いい名前ですね」

などと、フィオルと神様が話している。

要はここは神様の店らしい。

「チャクラ刀」やら「夜笠」など色々ある。

俺はその店でやたらと物を買って店をあとにした。

10話（後書き）

買った物については後で説明します。

やったー！！試験が終わったー！！
と思ったら部活再開

・・やれやれ

11話（前書き）

結構、更新が遅れてしまいました。

すいません。

11話

11話

「スカイさん、僕はまだ仕事が残っているので、アスタール様にご飯を運んで行って下さい」

フィオルが書類を書きながら口を開いた。

俺とフィオルは今、書類の整理中だ。

やれやれ。

シオン本人が飯くらい取りに行けばいいのに、と思っていると、

「アスタール様にご飯を届けたら三十分ほど休憩を取りましょう」

どうやら、休憩はくれるようだ。

だが、・・・三十分？

短すぎだろ！！

「せめて、一時間！」

「駄目です！・・・アスタール様も頑張っているんですから」

「どうしても？」

「どうしてもです」

どうやら、本当に三十分らしい。

「わかりましたー」

俺はそう言つと渋々調理室に行つて、シオンの飯を貰いシオンの部屋に行った。

「王様、飯だぞ」

俺は、そう言つてシオンの机にご飯を置いた。

「ああ、この仕事が終わつたら食べるから置いといてくれ」

「あ、そう」

俺は仕事をサボるためにシオンが飯を食うのを待つことにした。フィオルは飯を運ぶと言つたんだから、シオンの食後までいてもシオンの食器を運ぶため、と言い訳をすることが出来るのだ。

「スカイさん、起きて下さい」

どうやら、俺は寝ていたみたいだ。

「あれ、何で先輩がここに？」

「スカイさんが遅かったから探していたんですよ」

俺は神様の店で買った「腕時計型麻醉銃兼ライト（笑）」を見た。どうやら、俺は二時間ほど寝ていたらしい。

「まったく、いい加減にして下さい」

フィオルは、少々怒っている様子だ。

「まあ良いじゃないか。スカイも疲れていたんだろっし」

「良くありません」

俺は、シオンの机の上を見た。

まだ、ご飯が置いてあるのでシオンはご飯を食べてはいない様だ。

「先輩、先輩は王様のご飯を俺に運ぶように命じました」

「?・・・それがどうかしたんですか？」

「まだ、王様は飯を食っていない。ですから、僕は寝たふりをしながら陛下がお食事されるのをお待ちしていたんですよ」

俺は考えていた言い訳をした。

「つまり、アスター様はご飯もお食べになっていないのに、スカイさんはお昼寝をしていたんですね」

流石はフィオルだ。

賢い。

「まあまあ、そうカリカリするなよ、フィオル」

俺がフィオルの説教を受けていると、シオンが助け船を出してくれた。

「アスタール様もご飯をきちんと食べて下さい」

「ああ、この仕事が終わったら食べるよ」

俺の時と同じことを言っている。

「駄目です！今から、お食べになって下さい！」

だが、フィオルは俺とは違い、甘くは無いようだ。

「わかったよ。ところで、クリアード卿の納税問題はこうなってる？」

「すでに僕達が報告書を作成済みです。ですが、この食事を摂るまでは絶対にお見せ致しません！」

「ハッハッハ、フィオルは優秀だなあ。・・・スカイもそう思うだろう？」

俺は首を縦に振った。

シオンもフィオルも本当に優秀だ。

この二人が日本の政治を執ってくれたら、どれだけ良くなる事やら。

「君に来てもらって本当に良かったよ」

「これが僕に出来る精一杯の恩返しですから。あの時に陛下にお会いしなかったら僕達兄妹は今頃……。身分の低い僕なんかこんな幸せを頂いていいものかと「それは違う」えっ？」

「身分なんか関係無い。人は誰もが平等に、幸せになるべきなんだ。もちろん、そんな世界は並大抵のことでは実現できないが、・・・けれど、一番大事なのは絶対にあきらめない事だ」

「あきらめない事……」

「身分が低いから、そんなふうに諦めたりしないでくれ。どんなに誰かが君の事を蔑んでも、決して君は一人じゃない。きっと、たくさんの味方がいる」

「貴方がこの国の王になってくれて本当によかった」

「な、な、何だよ、急に？」

あー、・・二人の会話が続いている。

ってか、俺何？

蚊帳の外？

もしくは窒素？

存在感がまるで無い。

「さあさ、さつさとご飯を食べて仮眠をとってくださいよ。今夜は舞踏会もあるんでしょう？」

「はいはい、けどフィオル。お前も今週末は休暇を取れよ」

「えっ、・・・でも、僕は「妹のためだよ。・・・会いに行ってやれ」
ありがとうございます」

どうやら、俺は完全に空気扱いらしい。

「さて、スカイさん！今から仕事を四倍のスピードで片付けて
いきますよ」

やっとフィオルが話しかけてきてくれた。
・・・けど、四倍って。

「さて、じゃあ俺も百倍のスピードで仕事をするか！」

「王様（アスタール様）は寝て下さい！！！！！！」

12話

12話

さて、四倍で仕事をする、と言っていたフィオルだが、・・・本当にそれくらいのスピードで書類を書いている。

あれから時間が経って、今は二十三時だ。

父さんと母さん、怒っているだろうなあ。

それとも、心配してくれてるのかなあ。

フィールはもう寝ているのかなあ？

俺はあの日以来、看守のおっちゃんを父さん、その奥さんを母さん、娘をフィールと呼んでいる。

「スカイさん、まだいたんですか！！！！？」

「今頃、気が付いたのかよ」

「スカイさんはもう帰っても良いですよ。僕は今週末に休みを取るから残っていますけど」

フィオルが、いったん筆を止めてそう言った。

「そう言われても、・・・上司が働いていて先に帰る部下がどこにいますか？」

探せば、日本中にいてもおかしくは無いのだが・・・

「でも、・・・俺はすでに昼に二時間ほど寝ていますから」・・・
「ありがとうございます」

まあ、こういうことが今までにも1、2回くらいあったから何とかなるだろ。

そんな事を考えていると、いきなり扉が開いて五人の武装している男が入ってきた。

「だれだ、お前ら？」

質問に答えずに武装五人組はナイフでかかってきたので、それを躲けてそいつの鳩尾を殴った。

「こいつを殺されたくなければ、おとなしくしろ」

フィオルを人質にされてしまった。

「貴様ら、何が目的だ!？」

俺がそう言つと、

「お前ら二人の殺人だ」

男の一人が言った。

「逃げて下さい!」

フィオルが俺に言う。

「そんなことをして、どうする気だ!？」

「英雄王シオン・アスタールのお気に入りの二人を暗殺して英雄

王シオン・アスタールへの見せしめとするのさ！」

そう言えば、・・・今日残っておいて良かった。

危うくフィオルが殺されるところだった。

神様がくれた思い出そうとしたら鮮明に思い出せる記憶も思い出そうとしなかったら意味が無い。

男はさらにこう言った。

「お前が死ねばこいつは生かしておいてやる」

「さっきお前は、二人を殺す、・・・って言って無かったっけ？」

「確かにそうだが、貴様の首を優先しろ、との事だ」

はあ、・・・マジでかよ。

一体、俺に何の恨みがあるんだよ？

前世に残してきた彼女がこっちの世界でヤンデレ化したのであろうか？

もし、そうであるなら俺を殺す前に俺を殺した神様を殺してくれよ。

・・・まあ、俺は前世に彼女なんていなかったけど。
欲しいとも思わなかったし・・・。

「なんで俺の首が優先なわけ？」

仕方が無いので聞いてみた。

「貴様が人気があるからだ。貴様が複写眼の化け物だと知っても、人気はほとんど下がらずに、そしてそれを英雄王シオン・アスタールが部下にした。当然、英雄王の名は上がる。そこで、お前を殺し

てしまおう、という意見が提案されたのさ」

いや、人気者って困るね。

もつとも、本当に人気があるのは馬琴さん達なのだが……。

「だが、そこまで人気のある俺を殺せば、俺を殺した貴族側も人氣が下がるんじゃないか？」

「ああ、だからお前は自殺に見せかけて殺せ、との命だ」

などと、男は言っているがここで矛盾が生じる。

「だったら、俺が死ねば先輩を助けると言うのは嘘だな」

「何を意味の解らないことを」もし、お前が先輩を殺さなければ、その計画は先輩が生きて他の人に言えばアウトだからな。もしくは、お前がB A K A だけという可能性もあるがな。先輩がお前らの共犯だったら話は別だが……。おそらく貴族側は計画を実行したお前らも殺して事件を終わりにするだろう。頭のいい先輩ならそんな哀れなことはしない。……と言うより、そもそも先輩はいい人だ。B A K A であるお前らとは違うんだよ」言わせておけば図に乗りやがって……！！！」

そう言うともたちは全員で俺にかかってきた。

いや、……こんな軽い挑発に乗るところを見ると本当にB A K A の様だ。

俺は、金縛りの術で武装男達を動けなくさせて、神様の店で買った「腕時計型麻醉銃兼ライト（笑）」で眠らせた。

本来の「腕時計型麻醉銃」は麻醉針が一本しか入っていないのだが、

これは千本も出すことができるのだ。

それから、フィオル殺害計画を立てた張本人の貴族たちはしらを切り通して、フィオル殺害計画の真相は闇に葬られた。

12話（後書き）

わーい、一日に二話投稿だ。
わーい、留年をしなくて済んだぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819q/>

写輪眼を持って伝勇伝へ

2011年5月15日08時27分発行